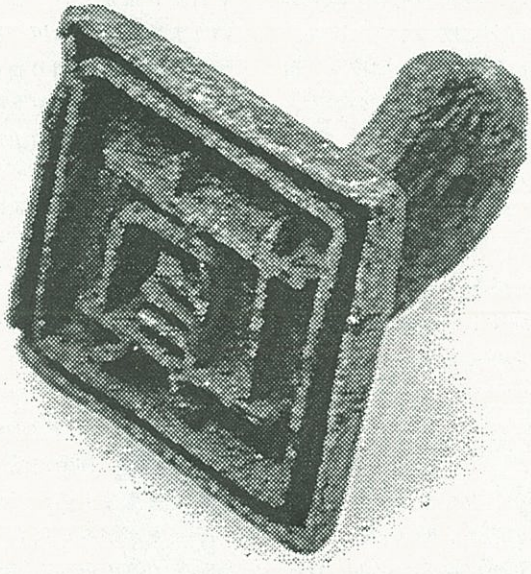
OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
1991・6・15
1

もくじ

◇発刊にあたって　2
◇古代の餘綾(1)　3
◇遺跡展望〜石神台遺跡〜　6
◇特別展・企画展の記録　7
◇トピックス／行事案内／資料の受入　8



発刊にあたって

館長 鈴木　昇

大磯町名誉町民の高橋誠一郎氏は、慶応義塾の塾務を統轄して敗戦後の義塾復興の難局にあたり、また第一次吉田内閣の文部大臣に就任して、教育基本法・学校教育法の制定など教育改革の刷新に尽力し、さらに日本芸術院長・文化財保護委員会委員長など数多くの要職に推され、そのうえ浮世絵の収集と研究においては屈指の水準にあった人で、まさに日本文化の指導的役割を果たしましたが、昭和57年２月末日97歳で死去されました。

高橋氏の手帳は今私どもの資料館に保管されていますが、昭和23年の手帳には、４月９日圖書館設置促進打合会町役場七時、17日大磯中学校起工式一時、５月21日大磯女子高等学校評議員会三時、22日老鶴会赤星邸三時、６月14日吉田氏訪問十時、15日大磯高女評議員会三時、７月23日大磯中学校上棟式十時半、12月４日大磯中学校竣工式十時、などの大磯町行事が、文部省芸術祭委員会、日本学士院、国際文化振興会、高等試験委員会、保守新党会議荻外荘、など日本の国家的行事と一緒に記載されています。

大磯町立図書館は献本運動を実施して同年秋設立されました。大磯女子高等学校は、現在の県立大磯高等学校の前身である町立大磯実科女学校のことですが、当時生徒が集まらず廃校の瀬戸際にあった同校を、町在住の名士達が評議員会をつくって支えたものです。評議員会は同年だけで６回も開かれています。

老鶴会は町在住名士持ちまわりの会のようで、樺山邸、浅野邸、赤星邸、安田邸、野村邸、当家、沢田邸、樽橋邸などが記載されています。これらの記録は今では敗戦後の大磯町を語る貴重な資料となっています。

高橋氏手帳のほかにも、同様なものが数多くあります。発掘現場で平安期の墨書土器を発見したとき、担当者は胸をおどらせ、また伊藤博文夫人梅子氏の高麗園での短歌「いまだ見ぬ　こまもろこしも　忍ばれて　そのふの梅ぞ　さきつづきける」とある高麗園の有様が全く不明であったのが、東京在住人の遺品として同園の絵ハガキが資料館へ寄贈されたときの興奮など、同好の皆様にお伝えする方法が全くなく残念でしたが、今回からはこの資料館だよりでその都度お伝えしてゆきます。

そのほか、この資料館だよりは学芸員が研究発表をする紙面にしたいとも思っています。まじめに取り組む小さな研究発表がつみ重ねられますと、大変貴重なものとなりますので大いに期待していますが、館外からの投稿も有志の研究発表として大いに歓迎いたします。

資料館だよりの性格上、館の行事案内やお知らせ、各種の話題、ニュースなども掲載しますが、これらのことについての情報の提供などもお願いいたします。ごく最近のことですが、東小磯にお住まいの某氏から五代目中村歌右衛門自叙伝のコピーをいただき大変たすかりました。それによって禱龍館の開館が明治20年８月だと推定でき、また茶屋町に建てられた太田楼という大旅館が、品川一番の遊廓太田楼の経営者で、五代目中村歌右衛門の養女をひいきにした男まさりの女将が、同名の旅館を大磯で経営したということも判りました。太田楼は明治27年から２年間明治天皇皇女の常宮と周宮が避寒のため数日間滞在された旅館です。文士が好んで泊まった松林館が開業したとき、歌右衛門は是非にと頼まれて泊まったことも判りました。この例のように人々の支えはとても有難いものです。これからもどうぞご協力下さいますようお願いいたします。

【表紙写真】

銅印（馬場台遺跡出土）

日本の印章は、大宝元年（701）の大宝令が最初で官印からはじまった。相模国印も天平７年（735）、天平勝宝７年（755）の押印されたものが残っている。私印は、続日本紀の天平宝字２年（758）の部分にみられるが、貞観10年（868）には家印の使用を奨励していて、上層階級から一部下層階級にまで及んだことを示唆している。はじめは四文字だったが、二文字・一文字のものもあらわれ、法量・形式・書体とも自由なものとなった。

この銅印は昭和63年(1988)、馬場台遺跡から出土したものだが、神奈川県でははじめてで、全国的にも数少なく貴重なもの。二重の四角の中に「塡」（てん）という一文字がみられる。手で持つところの形から「鶏頭鈕」と呼ばれている。

馬場台遺跡は、平安時代の相模国府＝淘綾国府の推定地でもあり、緑釉陶器や石帯なども出土している。

〈館蔵品にみる〉

古代の餘綾(1)

東海大学文学部助手　田　尾　誠　敏

「相模治乃　余呂伎能波麻乃　麻奈胡奈須　児良波可奈之久　於毛波流留可毛」(万葉集　巻十四　東歌)

大磯町は、海浜と丘陸の美しい景観や温暖な気候に恵まれ、古くより保養地として有名であった。近・現代では、政治家・文化人などが多数訪れ、政治の舞台裏として、また文化の一中心としての位置を保った。しかしながら古代においては、まさに地方政治の中枢として、交通の要衝として重要な役割を担っていた。

大磯町の大部分に重なる相模国餘綾（淘綾）郡は、冒頭の歌にも掲げたように、万葉の昔より歌の中に詠み親しまれている。凡河内躬恒・源重之・西行法師など平安時代の著名な歌人にも詠われ、そのほとんど全てが「こゆるぎの磯」を題材としたものである。これはその当時の主要街道がこの地を通っていたからであり、街道を行きかう旅人が餘綾の浜の景観に胸打たれたからであろう。

「こころなき　身にもあはれは　知られけり　鴫立つ澤の　秋の夕暮れ」(新古今集　巻四・秋)

西行法師（1118～90）が、新古今集の「三夕の歌」の一首に数えられるこの歌を詠んだ頃、餘綾の地には国府が所在したと伝えられている。相模国府は、高座郡・大住郡と三遷したと考えられており、12世紀中頃に遷ったその最後の場所が餘綾郡であった。現在の国府本郷や国府新宿といった地名にその名残を留めている。餘綾の地に国府が置かれる以前は、その場所には餘綾郡衙が置かれていたと推測される。大住の国府は現在の平塚市四之宮に推定されており、餘綾郡衙の時代においても、この地が交通の要衝であったことにはかわりはない。

近年の宅地開発や道路工事などに先立つ埋蔵文化財の発掘調査においても、そういった国府や郡衙の存在を裏付けるような出土品が得られている。またさらにさかのぼって古墳時代後期には、大磯丘陸の斜面部を中心に横穴墓が多数造営されており、県内でも最大規模の横穴墓群となっている。町内では、この横穴墓が営まれた古墳時代後期の集落遺跡は、まとまっては確認されていないが、当時の交流をうかがわせるような資料が得られている。

大磯町郷土資料館では、埋蔵文化財の発掘調査によって得られた出土資料を多数展示しているが、出土資料の中には遺存状態が悪く、展示に耐えないものも多く所蔵している。ここではそういった資料も含めて、大磯町の古墳時代後期～平安時代＝古代の餘綾を代表するような資料を提示し、解説していきたい。

もたらされた土器　―畿内産と駿東産の土師器―

相模国の殊に西部地域は、古代を通じて東海地方以西の文化の影響を強く受けてきた。それは土器の面にも顕著に現れ、在地産の土器に混ざって他地域の土器がもたらされている。今回は大磯町内の発掘調査等によって得られた資料のうち、畿内産の土師器と駿東産の土師器を紹介する。

畿内産の土師器は、大和国、河内国など近畿地方で作られた土師器である。飛鳥時代になると畿内では、精製された良質の胎土を用いた、暗文やヘラ磨きを施す土師器を生産する。坏類（坏・椀・皿）・鉢・高坏・壺といった器種があるが、坏類が多い、大磯町内では皿が１点と坏が２点、いずれも横穴墓内から出土して

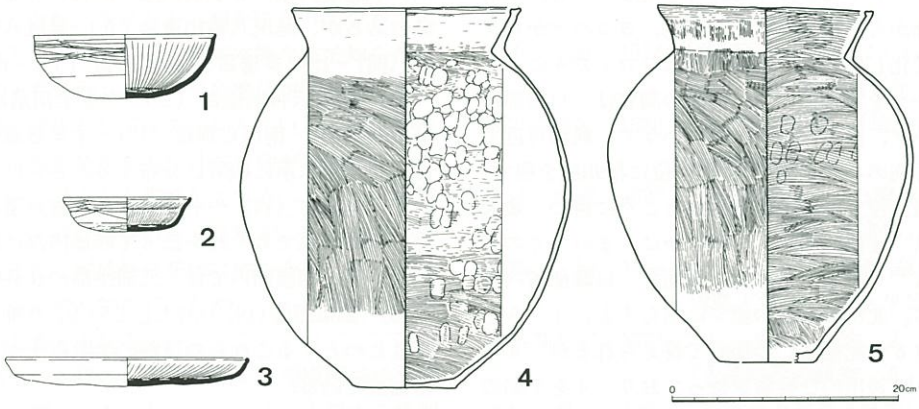


図１　町内出土畿内産土師器坏・皿と駿東産土師器甕（１～３：林部 1986より転載、４・５筆者実測）

いる(図１－１～３)。１は坏で、下田横穴(図２－１)からの出土である。体部内面に正放射暗文を施し、底部内面にラセン暗文を施す。体部外面には、ヨコミガキを丁寧に施す。２の坏と３の皿は、共に清水北横穴（図２－２）からの出土である。２の坏は、体部内面に２段の斜放射暗文、底部内面にラセン暗文を施す。外面は底部にヘラケズリ、体部に粗いヨコミガキを施す。３の皿は、体部内面に斜放射暗文を施し、底部内面にラセン暗文を施す。これらの資料を分析した林部均氏によると、器形の特徴および調整技法から１が飛鳥Ⅱ期（７世紀第２四半期）に、２・３が平城Ⅰ期（８世紀初頭）に位置づけられるという。

隣国である駿河国の東部で製作された土師器が、相模国でも数例出土している。現在のところ、相模国で出土している器種は、小田原市三ツ俣遺跡で坏が２例ある以外は、全てが甕である。大磯町内では、２点が出土している。４の甕は町内出土のものであるが、残念ながら出土の経緯ならびに出土地点がはっきりしていない資料である。外面の調整は、口縁部～頸部が、ヨコハケの後にヨコヘラナデでハケを消している。胴部はハケ整形であるが、上半部から下半部に移るにつれてヨコハケからタテハケに変化している。底部付近はヨコミガキによってハケを消している。底部には木葉痕が残る。内面の調整は、ヨコハケを底部を除く全面に施すが、口縁部内面はヨコヘラナデによって、胴部は指頭によって消されている部分がある。胴部内面には、その際の指頭痕が顕著に残る。胴部から底部の器壁は薄く、比べて口縁部は厚い。器形は、胴部中位に最大径を持ち、頸部は〝くの字〟状に鋭く屈曲し、口縁部端内面が肥厚する。５の甕は、石神台遺跡（図２－３)出土の資料である。外面の調整は、口縁部～頸部が、粗いヨコハケの後に細かいタテハケを施し、さらにヨコヘラナデによってこれらを消している。胴部は、上半部から下半部に移るにつれ、ヨコハケからタテハケに変化している。底部付近はヨコミガキによって、タテハケを消している。内面の調整は、口縁部が粗いヨコハケ、胴部が細かいヨコハケで、底部付近ではナナメ方向のハケを施す。胴部中位に指頭痕を残す。器形は、最大径を胴部上位⅓程のところに持つ。最大径から下は、底部に向かって緩やかに、まっすぐのびる。頸部は〝くの字〟状に鋭く屈曲し、口縁部端内面が肥厚する。北川恵一氏の編年に照らすと、４・５ともに２期（６世紀後半）の範疇で捉えられるが、４の方が５よりも後出的な要素を持っており、４を２期の新段階、５を２期の古段階に比定しておく。

それではここで、相模国での畿内産土師器と駿東産土師器の様相を、図２を見ながら概観していこう。図に示した遺跡のうち、■が畿内産土師器を出土した遺跡で、●が駿東産土師器を出土した遺跡である。林部氏によると、東日本における畿内産土師器の搬入は飛鳥Ⅱ期（７世紀第２四半期）から平城Ⅲ期（８世紀中頃）に集中するという。下田横穴出土の１は、東日本でも時期的に最もさかのぼる例であると指摘されている。東日本全般的な搬入経路として、当時の海上・水上のルートが指摘されており、相模国における分布については、相模湾沿岸地域に多く分布する。

相模国における駿東産土師器、特に甕の搬入は、１期の資料が在地においても不明瞭なため除外すると、石神台出土の５にも見られるように、最も古い２期(６世紀後半頃）のものがすでに搬入されている。この地域からの土器の搬入は、弥生時代後期から連綿と続いているものであろう。分布はやはり、相模湾沿岸部に見いだすことができ、加えて河川水系によって陸地内部にまで搬入されていることが分かる。この傾向は特に花水川水系に著しい。相模国以外での駿東産甕の出土は、伊豆諸島に多くみられ、相模国についても海上ルートによる搬入を強く指摘することができる。

出土遺跡について見ると、畿内産土師器は千代遺跡（４）・国府津三ツ俣遺跡(５）・真土六ノ域遺跡(10)・武蔵国であるが長者原遺跡（20）など寺院・官衙とその周辺遺跡、下田横穴（１）・清水北横穴（２）・武蔵国等々力渓谷２号横穴など横穴墓からの出土が目立つ。一般集落は、手広八反目遺跡（16）・片瀬大源太遺跡（17）などが挙げられるが、片瀬大源太遺跡では変形四獣鏡が出土するなど、古墳時代前期から拠点的な地域であったのかもしれない。

それに対して時間幅の広い駿東産土師器の分布は、千代遺跡・国府津三ツ俣遺・諏訪前Ａ遺跡（10：真土六ノ域遺跡隣接）など畿内産土師器の分布に重なる部分もあるが、尾尻八幡山遺跡（６）・尾尻八幡神社前遺跡（同）・比々多遺跡群西前遺跡（７）・根丸島遺跡（８）・田村天神前遺跡（９）・中原上宿遺跡（11）・新町遺跡（同）・南原Ｃ遺跡（12）・中里Ｂ遺跡（13）など、花水川水系に顕著に分布する。さらに相模川水系の子ノ神遺跡（14）や引地川水系の宮畑遺跡（15）など、他の水系でもそれを伝って陸地内部に搬入されている。他に相模国内では、三浦半島の長井町内原遺跡（18）・蓼原遺跡(19)で出土している。石神台遺跡(３）をはじめとするこれらの遺跡の半数以上が、一般の集落遺跡である。

畿内産土師器の東日本への搬入の意義については、林部氏や比田井克仁氏の指摘によると、律令国家の東

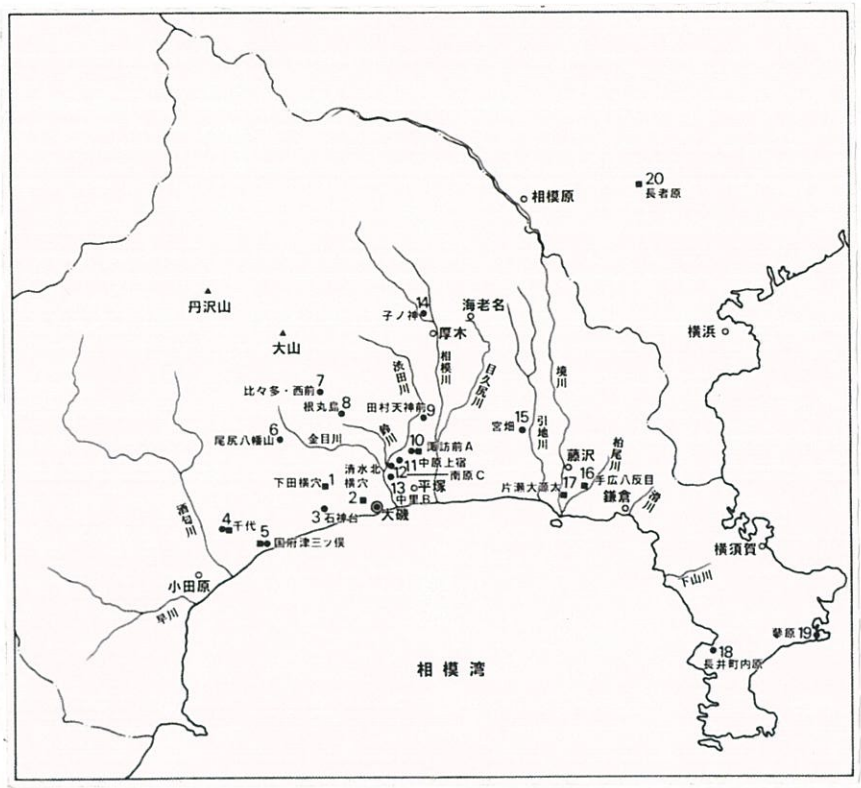


図2　搬入土器出土遺跡分布図

国支配に深く係わるとされ、段階的な搬入が見いだされるという。これは東日本全体の傾向として、畿内産土師器を出土する遺跡が、官衙遺跡や横穴墓といった特殊な遺跡が多いことなどからも裏付けられる。

それに対して、駿東産土師器の搬入の背景には何があったであろうか。駿東産土師器を出土する遺跡は、単なる一般集落が多く、出土する器種もほとんど甕に限られている。さらに水系をたどって陸地内部にまで及んでいることが、先ほどから明かになっている。当時、駿東地方・伊豆諸島は、平城木簡などで知られているように、煮堅魚（生節）・堅魚煎汁が特産品となっており、調や雑税として中央に納めている。瀬川裕市郎氏は、煮堅魚生産のための計画村落が存在してたであろうことを、早くから指摘している。こういった隣国の特産物が、殊に保存のきく食料が、陸地内部の集落に持ち込まれた可能性は想像に難くない。駿東産の甕は、こうした特産物の〝入れ物〟として集落内に持ち込まれたと考えられる。

大磯町出土の古代の搬入土師器を、相模国域での類例とともに概観してきたが、このように近似する時期に搬入された土師器を見ても、その目的と意義に大きな隔たりがあることが分かる。

脱稿後、図1に示した4の甕が町内馬場台遺跡出土のものと判明した。また、破片資料ではあるが、大磯小学校遺跡より2点駿東産甕が出土している。付記しておきたい。

引用・参考文献

石井　茂　1989『詩歌・文学に見る大磯の景観』大磯町郷土資料館
木下　良　1974「相模国府の所在について」『人文研究』59　神奈川大学人文学会
瀬川裕市郎　1980「藤井原の大鉢」『沼津市歴史民俗資料館紀要』4
橋口　尚武　1987「伊豆諸島からみた律令体制の地域的展開」『考古学研究』132
林部　均　1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』72-1
比田井克仁　1991「4　土器の移動　2　東日本」『古墳時代の研究　6』　雄山閣
北川　恵一　1988「駿東甕の初現と終末について」『沼津市博物館紀要』12

遺跡展望　～石神台遺跡～

大磯町には現在170ケ所に及ぶ古代人の足跡＝遺跡が確認されている。この内、縄文時代の遺跡は28ケ所で、時期的には早期～晩期まで見られるものの、前期および晩期の遺跡は極めて少なく、大半は中期～後期の遺跡である。

石神台遺跡は、町の中心部より約4km離れた国府新宿（現石神台）に存在し、大磯丘陵の南端、海抜約80mの第四紀の段丘上に立地している。大規模な開発により周辺の地形は一変し、現在は独立丘陵となっており、遺跡の占地する台地も住宅化が進んでいる。

石神台遺跡が最初にみえるのは、石野　瑛氏の考古収録[①]で、1939年（大正14年）2月、平塚の遺跡や史跡を訪ねた折り、この石神台に登り、多数の縄文土器を採集している。また、地元の郷土史家の方や国府中学校地歴部員なども採集活動を行っており、「石神台」は土器が拾える場所として広く知られていたことが窺える。

1972年(昭和47年)、宅地造成に伴い東海大学により発掘調査が行われた[②]。その結果、縄文時代から奈良・平安時代にかけての複合遺跡であることが改めて確認されたが、中でも縄文時代の配石遺構は下部に土壙＝穴が存在し、内部より人骨が出土している点で極めて貴重な類例を提供している。詳細は報告書に詳しいので省略するが、結局この発掘調査では合計25体以上の人骨が検出されていて、この台地が縄文人の墓地として利用されていたことが明らかになったわけである。

その後、1985・1987両年にやはり開発に伴い発掘調査が行われた。現在整理途中であるが、主な概要を記しておきたい。

まず、台地中央部で古墳時代後期の竪穴住居1軒が確認されている。内部より甕・甑・坏が各々完形で出土している。調査した範囲では同時期の住居はなく、この住居址1軒だけである。

台地南端部分には縄文時代後期のゴミ捨て場と考えられる遺構が発見されている。不正形をした擂鉢状を呈する遺構で、底の部分には雨水が走ったような痕跡が残っていた。内部からは土器片のほか、獣骨（鑑定中）が多数散在していた。おそらく、食用にしたものであると考えられる。

台地の西側部分には、頭大～拳大の礫が一面に広がっており、下部にはやはり角が丸味を帯びた長方形を呈する土壙が掘られていて、内部に人骨が埋葬されていた。かかる土壙が、墓地としての機能をもっていたことが改めて確認されたわけである。しかも、こうした土壙は単独のものもあるが、多くは切りあっており、時間差をもって構築されたことも判明した。そして、中には土壙の内部の壁にも礫を並べ、あたかも崩れを防ぐような工夫さえ見られた。また、石棒が斜めに突き刺さったような状態で存在したが、これなどは墓標の役目をしていたとも考えられる。

こうした土壙群の南側には、同心円状に広がるピット群が存在する。焼土もあり、住居址の重複と考えられるが、今一つ不明である。

このように、石神台遺跡は前述した3回の発掘調査により性格や内容がほぼ明らかにされたわけである。

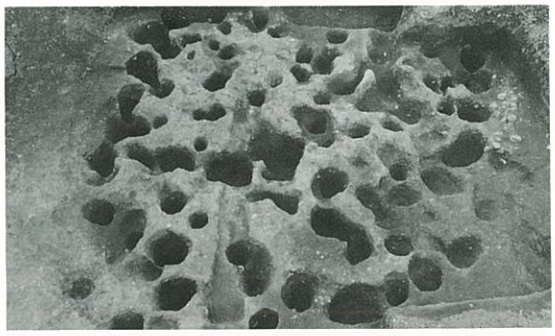
しかし、それと引換えに遺跡の大半は消滅してしまったこともまた疑いの無い事実である。これを報告書で肩代わりすることは到底できないが、極力多くの資料を掲載しようと奮闘している毎日である。

（当館　鈴木一男）

―註―

①石野　瑛　　1973　「中郡国府村の遺跡を訪ふ」考古収録第2

②高山　純 他　1974　「大磯・石神台配石遺構発掘調査報告書」　大磯町教育委員会



ピット群

土壙墓

特別展・企画展の記録

資料館では、年１回の特別展および３回程度の企画展を開催しています。ここでは、今までに開催した展示の概要を報告します。

▼開館記念特別展

『町屋園の日々 ―島崎藤村とその周辺―』

昭和63年10月26日～11月17日

島崎藤村の大磯における足跡と藤村をとりまく周辺の人々を掘り下げた。なお、会期中に東洋大学名誉教授・伊東一夫氏による「大磯時代の藤村先生と静子夫人を偲んで」と題した講演会を開催した。

▼企画展

『大磯再発見①　資料が語るモノ』

昭和63年12月６日～平成元年１月29日

資料館の資料収集活動への参加や協力を呼び掛け、今後の館活動への理解と関心を求めた。

▼企画展

『叙情の人・菊池重三郎

―よせられた書簡を中心に―』

平成元年４月18日～６月18日

英文学者・小説家として活躍した菊池重三郎の幅広い交際を示す資料を紹介した。会期中に俳優の福田豊土氏を招いて「おおいそ文学点描」を開催し、関連の詩人小説家の作品群を朗読で紹介した。

▼企画展

『丘陵の動物 ―生活史を中心に―』

平成元年７月11日～９月10日

大磯丘陵の特色ある動物を中心に、特に生活を再現することに主眼を置いた。

▼１周年記念特別展

『安田靫彦の画と書 ―大磯に在りし六十余年―』

平成元年10月15日～11月12日

安田靫彦の「人とその芸術」を偲び、書画20点の他書斎の復元を試みるなど多数の資料を展示した。会期中に作家の沢野久雄氏による「美と知恵―靫彦の人と芸術」と題した講演会を開催した。

▼企画展

『大磯再発見②　モノ・もの・mono』

平成元年12月12日～平成２年２月18日

資料館によせられた寄贈資料の紹介を主旨とした。

▼企画展

『土器が語る縄文時代の湘南』

平成２年３月６日～４月８日

土器を通して縄文時代の湘南を俯瞰した。会期中に日本考古学会の杉山博久氏による「湘南地方における縄文文化研究の歴史」と題した講演会を開催した。

▼企画展

『昭和の風俗画家　長瀬寳の世界』

平成２年５月５日～６月３日

視覚報道画家として活躍した長瀬寳の「線描芸術」を体系的にとらえようとしたもの。会期中に弥生美術館理事長・鹿野琢見氏による「竹久夢二の世界と長瀬寳」と題した講演会を開催した。

▼企画展

『大磯再発見③　大磯ゆかりの人々の逸品』

平成２年７月24日～９月２日

館収蔵品の中から、大磯にかかわりをもつ著名人にまつわる「逸品」を紹介したミニ展示。

▼特別展

『城山荘と城山窯 ―昭和の残影―』

平成２年10月14日～11月11日

明治年間より大磯に展開していた三井北家別邸（城山荘）を取り上げた。会期中に東京経済大学助教授の中村青志氏による「三井高棟と城山荘」と題した講演会を開催した。

▼企画展

『ヤゴと小川・ため池の生きもの』

平成３年３月３日～４月７日

大磯丘陵に散在する水域に生息する動物や、水辺に集まる動物を紹介した。会期中に丹沢箱根陸水研究会の石原龍男氏による「大磯丘陵　水辺の生きもの」と題した講演会を開催した。

▼企画展

『土器が語る弥生時代の湘南』

平成３年５月５日～６月９日

土器を通して湘南における弥生時代を俯瞰した。

なお、当館では上記の特別、企画展の図録をはじめ展示案内や絵はがき、文化財調査報告書等の図書を頒布しています。詳しくは事務室におたずねください。

【トピックス】

◇入館者10万人に

去る3月6日(水)、資料館の入館者が10万人に達しました。記念すべき10万人目は、厚木市より来館された嶋袋ひろみさんで、出迎えた石井町長から入館証明書と記念品が手渡されました。また、10万人目の前後の入館者にもそれぞれ記念品が贈られました。資料館では一昨年8月に入館者が町の人口（31,600人）を突破したことで、当初の見込みを上回る感触を得ていましたが、今回は昭和63年10月の開館以来682日目の達成となりました。

◇民話ビデオが完成

このほど、新しい民話のビデオが完成しました。資料館では、既に開館にあたって大磯小学校生徒のご協力で大磯に伝わる民話（3話）を映像化し、常時放映してきましたが、今回は国府小学校の生徒のご協力により新たに3話を追加製作したものです。1ヵ月ごとに3話ずつ交互に放映していますので、ぜひ幻想的な世界をお楽しみください。なお、話の内容は次のとおりです。

『道祖神とメヒトツ小僧』『身代わり地蔵』
『ねこの踊り』『きつねにだまされそうになった話』
『照ケ崎と千手観音』『泣の原の地蔵さん』

◇臨時休館のお知らせ

例年実施している燻蒸（殺虫・防黴のための作業）にともない6月24日（月）～7月1日（月）まで臨時休館いたします。

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧になるか、館へ直接お問い合わせください。

▼自然観察会　（小学生以上　30名）

初夏の動植物を観察しながら、大磯の自然を満喫します。弁当・筆記用具を持参。ハイキングの服装で。

7月21日（日）
アオバトを見に行こう！（照ケ崎）

▼丘陵を調べよう　（中学生以上　50名）

林や地域の環境によって発生する種類の違いやクマゼミの分布をぬけがらで調べます。特別な知識は必要ありません。対象は中学生以上ですが、小学生でも保護者同伴の場合は参加できます。

7月～9月　「セミのぬけがら調査」

▼企画展

『なつかしの風景Ⅰ　～海と海水浴場～』
7月21日（日）～　8月31日（土）

大磯のなつかしい風景を錦絵や古写真で振り返ります。シリーズの1回目は「海と海水浴場」がテーマ。

▼子ども歴史教室　（小学5年～中学2年生　30名）

3日間連続の教室。今年のテーマは古墳時代。

8月1日（木）古墳時代を知ろう！
2日（金）古墳を見に行こう！
（秦野市立桜土手古墳展示館）
3日（土）古墳時代人の衣服をつくろう！

【資料の受入】

（寄　贈）　ご協力ありがとうございました。

大　磯	椎野金造氏	漁具一括
大　磯	金子勝治氏	農具一括
大　磯	小巻広邦氏	農具一括
東小磯	外川一実氏	典籍（相州大山記）
国府本郷	山本エツ氏	城山荘資料一括
国府新宿	加藤英雄氏	泥メンコ
平　塚	二宮和子氏	泥メンコ
平　塚	加藤春雄氏	色紙（鈴木芳如書）

城山荘（三井家別邸）使用の薬缶

（移　管）
大磯町役場環境清掃課　　ラジオ

（購　入）
明治期彩色写真帳

Report　―大磯町郷土資料館だより―　No.1
平成3年6月15日
編集発行　大磯町郷土資料館
〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
TEL 0463（61）4700
FAX 0463（61）4660